

【コラム】日韓葛藤、礼に基づいて解決図るべきだー 日韓大学間交流の現場にある者としてー

2019.10.02



桂島宣弘

立命館大学名誉教授

私はこの30年、微力ながら日韓の学術交流、学生間交流に携わってきました。とりわけ、2011年からは、日韓中3国の大学横断カリキュラム(EUエラスムス計画の東アジア版)であるキャンパス・アジアの日本側責任者の任にあたり、国境の壁を越えた移動キャンパスを推進してきました。こうした実践を現場で担ってきた日本人として、常に念頭にあったのは、近代日本が中国や韓国で行ってきた侵略行為、人権侵害行為を謙虚に反省し、その歴史的背景を学生らとともに凝視していくことが、その交流の土台になければならないということです。幸いなことに、次世代を担う学生たちは、この土台を理解して相互に友情を育み、現在に至っています。

こうした現場から見ると、韓国大法院が新日本製鉄に対し、徴用工4人への損害賠償支払いを命じたことに端を発する一連の事態の根本的原因は、日本政府が侵略戦争や植民地支配の謝罪を怠ってきたことにあるといわざるをえません。日本政府は日韓基本条約、請求権協定で「解決済み」と主張していますが、それらが個人請求権まで否定したのではないこと、中国の徴用工に対しては鹿島建設などが賠償金を払っていること、日本人のシベリア抑留などに対する個人請求権は日本政府も認めていること、さらに何よりもこれらの条約・協定が冷戦下で多くの反対を押し切って締結されたものであり、そこで支払われた「賠償金」も日本企業の利益につながる「ひも付き」であったことなどは明白な歴史的事実であり、その主張は成り立ちません。だがよ

り憂慮すべきなのは、日本政府があろうことか居丈高な姿勢を示すことで、日韓国交樹立以来、不十分ながらも植民地支配に対する反省と謝罪に立って構築されてきた市民間の交流・信頼を、大きく毀損しようとしていることです。

韓国大法院に訴えた方々は、未成年の時に「技術を習得して将来朝鮮の製鉄所の指導的職員に採用される」という甘言による募集で大阪へ派遣され、無賃金同様に生死に関わる危険な重労働に従事させられ、逃亡を企て殴打されたこともあったと述べています。反省と謝罪は、まず何よりもこうした人びとの言葉に耳を傾けることから始まるべきものであるにも拘わらず、日本政府および日本のマスコミはそれに一切触れることがない姿勢で一貫しています。このことも、まことに憂慮に堪えないことといわざるをえません。

私は、徳川時代の思想史の一研究者に過ぎず、日韓関係を専門とするものではありません。だが、近代以前の日韓両国が礼に基づく国際関係を構築し、意地の張り合いはあっても最後はこの礼に基づいて解決が図られ、折り合いのつかない問題は棚上げする知恵をもっていたこと、朱子学に基づく普遍的価値からする相互の信頼関係が交流の土台にあったことから多くを学んでいます。現代における普遍的価値とは、分け隔てのない人権の尊重と、それに基礎づけられた平和な国際関係だとするならば、なおさら植民地支配への反省と謝罪に立ちかえらなければならないと思います。

現下の事態に立ち向かうためには、やはり日韓の市民間とりわけ次世代を担う学生間の友情と信頼を育んでいくことが重要だと考えます。無論、政府間で普遍的価値に立ちかえっての会談が緊急に求められています。だが、とりわけ日本政府の硬直した姿勢を改めさせるためにも、市民・学生間の友情・信頼が重要です。その活動を今まで以上に活発にすることで、現下の事態を「草の根」から打開したいと考えています。

立命館大学の桂島宣弘名誉教授は、徳川思想史(東アジア史学思想史)・民衆思想史を専攻した歴史学者だ。30年間、日韓の学术交流と学生間交流に携わってきた。2011年からは日韓中3国の大学がアジアにおける人文学人材を育てるために行う、政府共同支援プログラムである「キャンパス・アジア」の日本側責任者を担当してきた。